

報告

畑の浦史談会とその歩及

畑の浦史談会々々長
佐伯史談会 会員

富 沢 泰

一つの流氷が出来、しかもそれが流れつづけるということば偶然ではない。入津地区畑の浦は県南道一の悪路畑の浦峠、登り降り十二峠の峻険は海抜四立〇米余り、その山頂近くは小さなトンネルが抜かれ、佐伯市木立と蒲江所がつながる。トンネルを出ると途端視界が突然に開けて、視界一杯はリアス式海岸の静かな浦々が、それがそれ入江の奥深くそこにある。

この入江には五つの浦がある。畑の浦はその中の一つの部基で戸数四〇〇、人口二〇〇〇、トンネルを出てそそり立つ山腹を車日走る。断崖の足下何十丈の溪間は、旅行く人の心胆を寒からしむるも、春ともなれば数百の桜糸は一せいに目にこぼれ、山裾まで八折も続く。乃道の満山は山つづじが紅く燃える。筆者は若い頃この情景を唄ったことがある。

入津峠はつづら折り

通る車は夜蔭

深き谷間の岩一つは
紅き想いの色に咲く

今この峠も国道十号線なみの規模の県道、佐伯延岡線の道路工事のブルドーザーの騒音がすさまじい。あと三年もすれば里程の半分、佐伯まで十五分という短縮され

た近距離に変わって行くであろう。

畑の浦は、山と畑と海の里である。しかし山はけわしく且つやせて居り、山間の谷間の僅かな水田は、村人を養うにはとても足るべくもない。畑の一部の女かん畑を除いては、かつては麦と甘藷。これも農業経済の変革の今では、殆んど捨てられた作物、云はば田も畑も死んでいる。

だが海は生きて居る。かつて輸出産物の花形だった真珠業の、大分県下全生産高の八割が蒲江所が生産され、その金額十数億といわれたが、そのまた七割以上が入津の海で生産された実績がある。畑の浦は特にその中心の生産地であり、また技術の中心指導地でもあった。ここ数年この事業も全国的生産の過剰、漁場の荒廢による品質の低下、米国の経済事情による貿易不振と、厳しい経営難が続いたが、最近復調のきざしが見えたことは真に嬉しい。

これは此の事業に従事する人だけでなく、地域住民に及びす影響が極めて大きい。文化財調査の過程の中で出会う問題に、海上の生活関連が多く出てくる。更にもう一度地形的に総括すると、南北に連なる四五〇米以上の入津山脈は、今も山越えを拒みつづけるだけに、往古の木立・青山からの侵入の困難さは容易なものでなく、東に海を望むが、下入津芥崎・米水津キシメキ岬の断崖の下は、太平洋の激しい波浪が洗い、小舟での船路はこれとて至難であつたにちがいないが、一度湾内に入り込めば天然の良港、波静かな浦々ではある。

此の孤立に近い辺境は、佐伯の文化圏、云わば古代の統治圏の中ではさした恩恵はなかつただろうし、統治者から見ても、大した必要性のない地域であつただろう事

が想像される。何故なら狭少の田畑、その田すら下入津地区河内、西の浦にはない。漁獲物にしては近世封建制が確立してからの、瀬戸内地方との交易が始まってこそ、物産的価値が上つて来たものの、中世前はその地区の住民の生活を及ぼすに止まつたに過ぎない。すれは統治する者からみれば、單なる辺境に過ぎなかつたと断せざるを得ない。

近世徳川期に入つて漸くこの地区も毛利氏の統治があらぬく及ぶによつて、入津浦という呼称のもとに、毛利家所蔵の古い公文書にもその名が記されている。当地方榑木浦の部落古文書、慶安四年(一六五〇年)のものに、入津浦庄屋の名前が登載されている。辺境のそれだけに、此の畑の浦部落名りの、小さいながらもこの独自の郷土史が残されている。

私連畑の浦史談会は他から忘れられ、探求されなかつた不届なもの、未知なもの、この解明が使命であり、またそれだけ興味も深い。史談会の組織が出来、活動が及びまつた。つまり流れが出来、流れ続けようとしていた。然しそれは出来るべくして出来るもので、偶然ではないということば、此の地は戦前、戦後を通じて拾幾年、日本の刀剣鑑定家として歴史始にも名のある本阿弥家の流れとくむ、刀剣研究会があつたし、従つて古美術への関心度が高い。

また戦前、氏神伊勢本神社(祭神 神武天皇)の鼻社界格を旨指して、その資料しゆう集に榑木神官を中心として郷土史調査の爲、部落の史実、伝



説とする当時の古先達が多く参劃した事である。畑の浦地区は、立派な公民館建設も郡内ではいち早く行なわれたが、これを中心として社会教育活動が、極めて盛んである。老人クラブの集會、婦人会活動は極めて活発である。一つの例が料理・生花の研修は序の口で、公民館結婚会も解決済みで、又民謡舞踊の研究グループの如きまで、数年前から行なわれている等、公民館へも、その波及する影響は強い。人が集まるといふことが容易であると云えよう。

佐伯史談会の羽柴先生を迎えての昨年十二月の文化献酬室を皮切りに、鏡度先生はあの峠を越されたことか。塔の調査、復元に、古文書を発見すればそれも見えて欲しいと、こうしたふれ合いが最後の烽火点となつて、畑の浦の史談会発足となつた次第である。

数年前、今は病の為現職を去つた小野助役、現社会課長野口氏等が、佐伯史談会の面々を当地に招き、私達を迎えて、「二ヶ所部落の由緒の地を案内したが、この機は育たなかつた。機が熟してないと云うか、縁が結ばれなかつたのである。」

畑の浦は落人の里である。山は拒み、外洋は荒くとも、一度村裡に入れば、谷間の土地は水利はよく、水田として耕され、平畑は畑もかなり広い。入江には魚貝が豊富に自生し、落人達には絶好の桃源境となつたに違いない。先ず平氏の落人にはじまる壇の浦の戦いに敗れたその残党は、安住の地をここに定めた。後代の子孫によつて祀られた墓石が一基あつて、一統は今も香華をたむけている。吉野朝期、南朝方の肥後菊池氏の一族は、この地の小峡に下着した記録が残されて居り、この子孫が畑の

浦佐民の主流をなし、その遺跡も伝わっている。関が原の役に敗れた三任長官我部氏の一党も、海路此の地に逃れ来った。俗稱「瀧の観音」は、彼等の信仰の中心であり、此の一族の後裔もその血脈は多く、また観音信仰は三百数十年余の伝統を今も残している。

昨年秋、私は初めて佐伯文化会館に出向いて行った。佐伯地方の花園会（臨済宗妙心寺派寺院の会）が、松原茶道師を招いた般若心経の講演会出席のためである。その会堂の舞台上に垂れた豪華な大緞帳に、まぼろしの神、吾人が、大入島日向泊の神の井に水を汲む神々の姿である。

かつてこの絵の原画は、旧佐伯中学の校長広橋室に掲げられていたことを記憶している。菅画伯の筆になるのは衆知のことであるが、この絵姿に再び逢うことの出来たことは、大いなる驚きと喜びであった。

私は、神武天皇余孫、つまり神武天皇を祭神とする伊勢本神社の氏子である。

神武天皇の存在についての史的実証には諸説があるが、これは歴史学者の熱心な研究にゆだねて、神武天皇が日向地から大和を志して、民族東遷のみぎり、早坂の門の風波を避けて、立ち寄った曲の浦、細の浦の里として、神武天皇を祀り、日向泊の神の井に清水をよもめた神話の地、佐伯地方に住むものは、この緞帳の主人公に畏敬を表すことは、大きく、かみ美しい口マンではないだろうか。

伊勢本神社は、東遷の途次使われた水甕を入れた土甕を御神体としてゐる。土甕の時代考証はさておいて、春四月三日、四日、桜花らん満と咲き乱れる神苑から緑り出す御宗祭の熱狂振り、此の里の風物詩とも云えよ

う。

私の父は長らく村役場の収入役を勤め、昭和の初期急病で死去した。しかし熱心な農業者であった。いち早くかんき植え、家畜、米作と、地方産業指導の一線に立っていたのだが、また新らしいり屋でもあった。澱粉製造を志して北海道に旅立った。これは成功しなかつたようだが、ジャガイモの種を持ち帰り、菜園に広く作った。私はその花の白さを、子供の日の想い出としてい。それは大正の初期だった。また鹿児島から砂糖きびの種を入れ、此の地方一帯の畑がきび畑化したこともあった。父は自らこの製造に従事していた。私の郷土史への関心は、この期に種が蒔かれていたように想へる。

当時黒砂糖はまだ里の人達の、日常の消費物資となつてはいなかつた。お祭、節々の餅のあんこに使われていた時である。その黒砂糖が私のうちの茶の間では茶塩となつて、集まる話好きの古き達の舌を喜ばせていたようだ。テレビもラジオも、また新聞購読すらほとんどなかつた時代、秋の夜長冬のこたつの夜話に、茶を呑み黒砂糖を味あうは絶好の雰囲気となり、里にある伝説、史実を語り合う何よりの場ともなつたわけである。それはひとり私だけでなく、史談会を構成している多くの同志は、似たかよつたか「零團氣」の中で聞き憶えて語り来たようである。

話が少しそれたので、畑の浦史談会の歩みに筆を返すことにするが、蒲江所に文化財保護条例が出来、文化財調査委員も四名任命され、私もその一人となつたのは四十六年の九月頃であった。当時はずで此の地元の同好の士数人は、倒れた墓、壊れた五輪塔を尋ねまわつて

ひま人」。「物好き」と云われ、近親者曰「罰が当るから」と心配もしていたようだが、決してみま無關心ではなかつた。何故ならこの里の伝説、史実は、自分らの遠い先祖の物語りで、今その足跡を記っているからだ、と云えよう。ともかく昨年五月、佐伯史談会を親として、羽柴先生を通じて諒解を受け、その名に倣って「柳の浦史談会」と称することにした。現会員は二十余名の小教だが、農・漁業・神官・僧侶・公務員等々、年令も八十才から三十才まで、入るものは大歓迎と云うところ。

これまで僅か一年足らずだが、素地約な活動があつただけに、約二年余りの成果となるが、先ず蒲江所岡本教育長が、県教育委員会の入江先生を招き、二度ほど石造文化財調査を行つていたようである。史談会が活動するに当って、何かと便宜を計つて下さるのは有難い。先ず会員の啓蒙教育、それには所教育委員会主事の富高君が、大分県立図書館の視聴覚教育の中にある、映画教育のフィルムを極力利用した。しかもそれは文化財探検のもの一本にしぼつて既に十二巻、大和法隆寺の仏蓮を挿入、山の辺の路を逍遙し、あるいは大分県の古き石仏の林をすする等、無銭旅行で貴重な勉強機会を重ねた。つい二、三日前の夜、信州松本城と姫路城のフィルムを見たが、松本城は美術的な描写で、また畿内史的に解明してあり、姫路城は美学的な描写で、また畿内史的な攻防の見せ方では感銘と覚えたものである。金閣・銀閣も観たが、單に殿堂の構成美、築度の芸術性だけでなく、同時代の全国的豪華等の政治的情勢を写し出すなど、同時代の全国的豪華の種の文化財教室は生かし度い。

近隣の文化財、歴史の探訪も、佐伯史談会にまねて二度僅し、会員の殆んどが参加出来たこと、足での教育

ともいふべきであらうか。

蒲江所九市尾の奥に、瀧内という溪谷がある。この谷はほとんど人跡のない、かつては里人には恐れられた筈だが、三十数年前、真言宗の行者奥野師がこの地を修業の場と定め、且つ安心立命の仙境として、錫を留めた。

雨露をしのぐ仮りの庵を設け、食を乞うて露命をつなぐ、全く巖陣中の食糧事情のようには必死の苦闘をつたに違いない。今は登るに足る路も開かれた。訪れる人を迎える草庵も出来た。深山幽谷を借景とする庵も出来、足下の庭泉には緋鯉も泳いでいる。大瀧・小瀧をつなが山路も、若者には言うまでもなく、老人・子供でも染々とたどることが出来る。

今この瀧内は、蒲江所の海のさんご礁に比肩する、信仰と観光を兼ねた存在だ、県内唯一の溪谷美といえよう。云うなら今、創られた文化財であり、世上眞野老僧を、「今禅海」と云うは過言ではあるまい。俗塵を避け、瀧しぶきにぬれながらこの老僧の足跡の物語をきき、あるいは詩想を練る等々、若者は青春の一日を、若葉紅葉の溪を歩きながら、人生を語るにたる伴侶をとまなうも、意義深いことではなからうか。また惜しくも途中の車道と山道の足許である。町行政の力をもつてこの点を打開することは、老師に報ゆる人の道とも考えられるが、取立て苦言を呈する次第である。

昨年十月八日、佐伯史談会の好意で迎えられ、いわゆる「佐伯の史跡」を訪ねたことは、佐伯史談第八十五号に紹介されたので、ここでは省略するが、広い佐伯地方の歴史を識り、残された文化財を見るを得たことは、私たちが史談会としては収穫は大きかつた。井の中の蛙も、時に大海を泳ぐとも云うべきか。

更に私はその月の下旬、国東半島の両子寺に詣でる機会を得た。それは此の地のふかん作りの皆さんの、国東地方のふかん視察のバスに便乗して、長駆両子寺に登るを得たのである。金山紅葉に燃ゆる山内の、古き仏にぬかづき、国東塔の説明をきき、不動尊の石仏に驚く等、これは史談会員ならずとも、同行數十名の心深く、国東の仏教文化の何たるかの一端にふれ得たものであらう。両団体に聞わりある私としては、この上もない喜びであつた。

史談会の私達は「行」もしなくてはならぬ。文化財探窟の中には、故人の霊を祀る死との対面がある。人間と仏との間あり合ひである。限りある人世が子孫という血の流れで、後代にこれが伝えられ重ねられて永遠にたつたがる。

藪かけにある無縁仏にも、路傍にたたずむ石の地藏尊にも、かつてここに人があつて生活し、そして死んで行き、あるいは病む人もあつた。此の生死の中に信仰が生じ、仏と結ばれて行つた。その過去の墓、古塔を今の目でみて、捨て難い石の造形美を、改めて発見出来る場合が多い。

荒れて行くものを保ち、壊れたものを復元しなくてはならぬ。これはまさに「行」である。しかし何よりも楽しい「行」である。

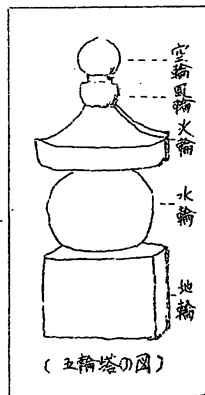
そそり立つ断崖の山ひだに少々の広場がある。一本の巨木が空をおおっているが、その崖と木の間に、五輪塔は地表にあるいは地中に埋もれて、雑草がさらに生い繁っている。草を払いよき掘り起こして行く。初め七、八基と思つた五輪塔群は、かなりの数の計算された。地輪を

すえ、水輪・火輪と重ね風空輪を高く載せて、どうにかつり合ひのとれた一体となつて行く。こうしてずらりと二十七基程の塔の群が復元された。

これは去年の春、会の発足を記念して行つた、俗稱「龍の観音様」、音羽山清水庵の森の一隅にある、長曾我部一族の供養塔を復元した「行」の日である。福泉寺竟洲住職・清水庵近藤住職(現河原清向原寺住職)両師も、作業衣を改めて名香をくゆらし、観音経の読誦をなさる。今から三百数十年前、関が原に敗れた長曾我部が一族が非運をかこちながら此の地に眠つたであらう。わがわがの霊も、久方ぶりに供養の読経をうけて、慰められたにちがいない。集まつた有縁の人々は順をおうて焼香し、私達会員にも及んだ。

私達はこれを機に、まだ多く草むらに埋もれている石の仏達のあるのを知っており、また更に見つけ出さぬはならぬ。石仏の中に今一つつけ加えなければならぬものがある。それは巨大な庚申塔が数基、藪陰に倒れたままである。かつてここに部落の道があつて、奥の部落(南池一族が下着して住みつたところ)とつながる野路の傍らである。殆んど台座から天蓋まで二米もある花崗岩で出来ているもので、「庚申塔」の称名が刻まれているもの、青面金剛のお姿の刻み出されているもの、それらはいずれも元禄期のものである。中には「豊後佐伯郡入津組畑の浦」と書かれ、供養者の姓名が列記され、その名前によつては今日でも家名を継いで、その名を伝えているものもある。

いづれにしても、この庚申塔はかなりの重量であるが、



海路以外には搬入の方法はない。然も瀬戸内地方特産の花崗岩であるが、佐伯を中継としたことも考えられるが、他郷にもあちこちに大きな花崗岩の五輪塔群がある。これらを含めてやはり船便による瀬戸内からの搬入ということになる。更に進めて物資の交流、日向路の船の寄港地、幕末から明治の初年にかけて「船行き」と云われる港の女達の話を、少年の頃夜話にきいたものである。このように、海という場での生産販売と経済生活の断面が出て来る。この探求も野の仏達の復元と共に、郷土史調査の重要な仕事の一つである。

昨年十二月、青年団主催の恒例の産業文化祭が催され、烟の浦史談会は文化財コーナーの展示を受け持った。言わば今までの集大成ともいうべきであろう。これは他から見れば、全く井の中の蛙であり、「たらいの中の水」の展示かも知れないが、全員協力して展示に当った。

会場は烟の浦公民館。一室に古文書、故人の所蔵品、茶振品、数は少ないが出品出来るものは集め、出品出来ないものは現地撮った写真と展示した。当地出身の富高主事の「烟の浦文化財の散歩道」の大字の地図に現地写真での案内は、一般参観者の理解を深めるのに、立派な資料だったと思う。

一般成人の参会者は三百人程度に過ぎなかったが、二日間下豆って、小中学生殆んどこの展示室に殺到したように思われた。これには原因がある。公民館の中で女子青年団がバザーを催したからである。安くてもうまい皿一杯のカレーライス、ケーキ、うどん、さてはぜんざいまで。恒例の行事だけに、少年少女等母親からせしめられたいで、二日間を腹の祭典と化したわけである。その餘波が食堂近くの文化財コーナーに及んだものである。

然しこの子等を迎えて説明してやると、今まで一度も見なかつた、聞かかつた郷土史と、それを証する品々に驚き、深い関心を示した。私達が夜話して聞いていた古老の物語の場は、今は殆んどない。この子等には、今テレビがある。時代ものなら笛吹童子、今更のならウルトラマンエース。しかし時代は古がって来、此の里の子等は扇山の麓から出た石斧や古土器には、考古学的興味を示し、古い先祖の所持品だった短刀やかぶとを通じて、時代の隔たりを縮めて親近感をもつたようだ。この少年少女等のこの二日間の経歴は、たくましく成長して行く心身の発達過程の中で、その記憶はうすれて行くかも知れない。しかし我々が真剣に郷土の歴史と文化財に取づく目標に、この子供達の心の中に、種々蒔かれたと信じられる。

たった二日間、たつたが、どう集めどう展示する、そしてどう理解させるか、私達には貴重な体験とはなつた。私達の烟の浦史談会は日浅く、且つ歩みの中民狭いが、この運動を続けることによつて、蒲江町内各部落に今更埋土れていく文化財調査の運動が、起き立つてあるうことを念じている。言わば一粒の麦でありたい。

私は今日も烟の浦岬の麓にあるみかん園に歩み出て行った。新しい峠の道は盛んに車が走っている。ブルドゥーガーが、ダンプカーが、生コン車が。しかしそれらを知らぬ氣に入津の山麓は、早春の雲の下に遠なっている。私は羽柴先輩から贈られた、天保の頃の郡奉行、大助明石秋室が、かつて巡回の途次詠んだであろう七言の詩を、微吟しながら自転車かペダルを踏む。

欲下入津雲坂長

(入津に下らんと欲して雲坂長し)

俄驚氣候變炎涼

俄に驚く氣候炎涼を愛する事

横空一嶺界南北

空に横たう嶺は南北を界し

北麦青青々南麦黄々

北は麦青青々南は麦黄々なり

(以上)

この頁をかりて、読売新聞佐伯通信部、並に大分合同新聞佐伯支局の方々に、私共畑の浦史談会の研修や作業に対して、適切な御指導と御協力をお願い致しましたことと、会員一同に代り、心からお礼申し上げます。

レポート

弥次郎貝騷動始末記

編集 畑の浦史談会
資料 楠本若小野萬藏後代
提供 小野 太

今年(昭和四十七年)は弥次郎貝が大騒生し、その株收風景はさながら源平の合戦を思はせ、漁船百數十隻に達し、縦横無尽に海上を駆け廻る。その姿は勇壮そのものであった。

ここに「漁場妨害差し拒み事件」として争われた、明治時代の弥次郎騷動を、古文書によって記述するものである。

(一) 事の起り

明治九年三月、畑野浦平民漁業戸高弥次郎外十一名は、「ヨコナゴロ網代・ツクリ網代」を県庁より捕漁採藻として借受けて、以来この網代で漁業を行ってきた。

ヨコナゴロ網代とツクリ網代との海内、寸女おち東は大双津網代、西はツクリ網代の西端よりスノ原の西端まで見通した海内に、弥次郎貝が多く生殖して、明治十六年頃に至り、弥次郎貝の敷路が大いに開け、需用が増加した。ちなみに、明治十六年富沢綱藏氏が製品(わでて)を身乾燥として、水産博覧会に出品して大好評を得た。

『この頃より西野浦の漁民海内に来るを以て其の都度之を追い払い敷手路を絶つた』と記録されている。

(注) 明治十六年、東京上野公園で水産博覧会が開催され、当所からも外に漁網の出品者があり、入賞して大賞状を受けている。

(現在高山の山下源一氏が所蔵)

このように、水産業界の活発な動きの中で、漁民の手近がな現金収入は魅力的なものであったと思われる。

弥次郎貝は煮てむき身にして婦人が販売したり、更に干して他県に出荷したりして鉄になるので、西野浦の漁民がヨコナゴロ網代・ツクリ網代にやって来ては貝を採集する。これを実力行使で追い拂い、五六年間は畑野浦の漁民が独占していたこととなる。

長い間のイガミアイが尾を引き、生活を掛けた漁業権抗争はその極に達した。

これが弥次郎貝事件の起りである。

(二) 訴訟の起り

明治二十四年五月、下入津村大字西野浦(相手)合手 貝生